

生涯学習だより

第37回北海道生涯学習研究集会

昭和57年に発足した本支部は、北海道における社会教育・生涯学習の研究者及び実践者相互の交流と協力関係の促進を図り、本道における生涯学習の振興に寄与することを目的として、北海道生涯学習研究集会の開催など、北海道らしい生涯学習社会の実現に向け取り組んでおります。日ごろより本支部の活動に対しまして、温かいご理解とご支援を賜り心より感謝申し上げます。

平成30年度の研究集会では、「今こそ社会教育の本質論(社会教育とは何か)～社会全体の役に立つ社会教育を考える～」をテーマに開催いたしました。「社会教育は重要になっている」というフレーズは、よく耳にするのですが、文科省の組織から社会教育課が消えるなど、その実態が見えにくくなっているのが現状です。そこで、「社会教育の本質とは何か」「社会教育は誰が何のために行うのか」等について、ご参加の皆さんと一緒に考えてまいりました。

昨年、11月の第37回研究集会におきましても、前回のテーマを継承し、「今こそ社会教育の本質論Ⅱ(社会教育の魅力)～「人がつながる」ことの意味を考える～」をテーマに開催いたしました。

一昨年末に、中央教育審議会から「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」が答申されました。この中では、社会教育を通じた「人づくり」や「つながりづくり」は、それ自体が一人ひとりにとって大きな意義を有するものであるとともに、地域が直面する様々な困難な状況の中で、住民が主体的に課題を発見し、共有し、解決していく持続的な「地域づくり」という点においても大きな意義がある、と示しています。そして、最後には、社会教育を基盤とした「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の重要性は地方行政全体を通じてますます大きくなっていると結んでいます。

社会教育活動は、誰が、何のために行うのか。社会教育は、人々の役に立っているのか。その答えの一つが「人がつながる」というキーワードであり、このキーワードの意味を一人ひとりが深く考えることこそが重要ではないかと思えます。そこで、第37回研究集会では、中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員もお務めになられた前愛媛県新居浜市教育委員会教育長 関 福生氏による特別講演をはじめ研究・実践発表、研究協議を行いました。今号の支部だよりでは、昨年の研究集会の内容を詳細に掲載しております。当日参加することのできなかった会員の皆様にも、ぜひご一読いただければ幸いです。

本年も学びを通して地域課題の解決を図る社会教育・生涯学習の推進に、全力で取り組んでまいりたいと思っておりますので、皆様のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(支部長 佐久間章)



令和元年11月9日(土)、第37回北海道生涯学習研究集会を、北海学園大学を会場に開催いたしました。当日は、支部会員をはじめ社会教育行政、学校教育の関係者や学生など、70名に参加していただきました。

第37回 北海道生涯学習研究集会

<2019年度テーマ>

今こそ社会教育の本質論Ⅱ (社会教育の魅力) ～「人がつながる」ことの意味を考える～

「孤独死」「ひきこもり」「自殺」「ストレス障害」…。戦後の貧困時代を乗り越え、世の中では多くの人がモノの豊かさを享受しているはずなのに、新聞紙上に毎日のように溢れる「こ・と・ば」。この社会問題の原因はどこにあるのだろうか。モノの豊かさとかココロの豊かさの関係はどうなっているのだろうか。人の幸せとは何だろうか。心の豊かさとは何を指すのだろうか。「裏切り」「いじめ」「卑怯者」…そして「殺人」。人を信じることができなくなってしまったが故に、人間の暗い一面ばかりを背負って人を傷つけないと生きていけないような悲しくて、寂しい人たちが、今、増えていないだろうか。社会教育活動は、誰が、何のために行うのか。社会教育は、人々の役に立っているのか。その答えの一つが「人がつながる」というキーワードであり、このキーワードの意味を私たち一人ひとりが深く考えることこそが、「心の豊かさ」「人の幸せ」を探す手がかりになるのではないだろうかと考えた。社会教育活動を通して、人は本当につながり、心が豊かになっているのか、社会教育は人の役に立っているのかを多くの実践事例から探していきたい。

- 1 趣 旨 北海道の地域性を踏まえた生涯学習社会の実現を目指して、道内の生涯学習に関わる研究者、実践者及び生涯学習に関心を持つ道民などが一堂に会し、日頃の研究成果や実践の発表及び意見交換を通して、相互の交流を深め、協力関係の一層の促進を図る。
- 2 主 催 日本生涯教育学会北海道支部
- 3 後 援 北海道教育委員会、札幌市教育委員会、(公益財団法人)上廣倫理財団、札幌国際大学、北翔大学、北海学園大学、(公益財団法人)北海道生涯学習協会、北海道社会教育懇話会、北海道教育委員会社会教育主事会、北海道社会教育主事会協議会
- 4 期 日 令和元年(2019)年11月9日(土) 10時00分～17時00分
- 5 会 場 北海学園大学 豊平キャンパス
- 6 対 象 (1) 生涯学習・社会教育に関わる研究者・実践者及び学生
(2) 市町村・市町村教育委員会職員および各種審議会委員
(3) 生涯学習・社会教育関係団体関係者および小・中・高等学校等の教職員
(4) 生涯教育・生涯学習に興味・関心のある者 等
- 7 日程及びプログラム内容

10:00	10:15	12:00	13:00	14:30	14:45	16:15	16:30
開会式	研究実践発表	休憩	特別講演	研究協議		全体会	閉会

【特別講演】 今こそ社会教育の本質論Ⅱ (社会教育の魅力) ～「人がつながる」ことの意味を考える～

講師： 前愛媛県新居浜市教育委員会教育長
新居浜市生涯学習センター長 関 福生 先生



愛媛県新居浜市生まれ。
昭和56年に新居浜市役所入庁、泉川公民館主事勤務を皮切りに、社会教育主事として社会教育を中心に勤務、平成22年社会教育課長、その後市民部長を経て、平成31年3月まで教育長。その他、中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員等を歴任。

つながりを力に変える学び……………

1. 自己紹介

昭和の公民館が私の原体験である。平成の初めの生涯学習への転換点で多くのことを感じた。生涯学習都市宣言、首長部局での生涯学習のまちづくりも経験し、社会教育主事発令も三度受け、三度目の教育長時代には、学校教育と社会教育の文化の違いを感じた。
2. 「つながり」について思うこと
 - ・「創発」:部分の性質の単純な総和にとどまらない性質が全体として現れること $1+1=\infty$
 - ・「絆」:本来は家畜を通りかかりの立ち木につないでおくための綱
 - ・「セレンディピティ」:偶発力、能力+志+偶然→幸運
3. 社会教育の深化・発展に必要な「つながり」
 - ★ 学びと活動が循環する過程を経て、つながりが蓄積され、信頼関係を強化していく。
 - A 人のつながりを考えてみる:縁を生かす。

エピソード1:武者修行のすゝめ、失われた20年、研修の場の縮小、ネットの悪弊一人で行くことが学びを深める、帰ってからの情報共有がカギ。エピソード2:ベンチマークのターゲットを発見する…創造か模倣か、市民大学の開設・出前講座・生涯学習のまちづくり。エピソード3:自力本願か他力本願か…“受援力”、社会教育は他人の力を活かすのが基本のはずなのに。エピソード4:キーワードは「対話」、白か黒かを求めない、納得解を探る努力、正解なんてない、共通理解できる地点を探っていく作業が必要なのに。エピソード5:地域教育実践交流会…変わり者(志の高い者)が集う場
 - B 施設・機関のつながりを考えてみる:社会教育はネットワーク行政の要になっているか?

公民館事務所の現状を昭和の頃と比較してみると…集う・学ぶ・結ぶ、雑談?。公民館と生涯学習センターの関係性は…。公民館と行政担当課の関係性の変化…社会教育課・首長部局?。公民館と関連施設(高齢者福祉・環境・子育て支援 etc)。社会教育と学校教育の関係性は…コミュニティスクール・地域学校協働活動。公民館と「地域運営組織」の関係性…そもそも一元的なもののはずだが…(後述)。

★対話の少なさ・壁の存在・橋渡しができる人材の不在⇒現状維持⇒相対的後退

エピソード1: 公民館海援隊と図書館海援隊の違い。専門職の位置づけの違い(司書と公民館主事)・現場と研究の乖離。エピソード2: 文部科学省の実証研究事業。学び合い、支え合い地域活性化推進事業。新しいまちづくり組織。“限界集落なんていわせない”…占冠村・会津坂下町・邑南町・別子山。公民館 GP 健康寿命延伸プロジェクト

★実証研究事業の報告会などを通じて同様の悩みを抱えた自治体の交流促進。

同じような悩み・対処の方法は異なる⇒つながることで解決のヒント獲得

C お金(予算)のつながりを考えてみる: 首長部局との関係性を構築してみる。

多様な行政課題・地域課題に立ち向かう。地域課題の解決は社会教育の領域である ⇔ 教育のみが担当領域。首長部局には潤沢な予算(予算は教育委員会独自には立てることができない)。一年間で答を求められる一般行政⇒教育は長期的な視点で評価?。行政課題の解決には学びが不可欠にもかかわらず苦手、一方的な啓発・啓蒙?。

★本来必要なのは、行政全体の“社会教育化”(学びと活動実践のサイクル構築)。

公民館等の豊かな社会関係資本を有効活用するために、上手い働きかけが必要

エピソード1: 文部科学省の実証研究事業へのチャレンジ。昔は全国共通の補助事業 → 公募型の委託事業。なぜ公民館 GP に1%の公民館しか名乗りを上げなかったのか?。その背景を探ると社会教育の現在の弱みが見えてくるのでは。エピソード2: こどもゆめ基金をはじめとする公募事業へのチャレンジ。行政は申請主体にはなれない → 活動主体を育てる。手続きが厄介 → 必要なノウハウを学ぶ機会を提供する。エピソード3: クラウドファンディングへのチャレンジ。自分たちの志に賛同する同志に呼びかける。企画で勝負する姿勢。企業の社会貢献活動。説明責任・情報公開のスタンス。

4. つながりを創っていく人材の必要性

これまでの社会教育の人材育成に欠けていたのは「何のために」という目的意識。さらに言えば、どのような人材、どのレベルの能力という目標がなく、育成そのものが目的になっていたのではという反省。

“戦略的な人材育成”、“出口を確保した人材育成”、“人材の発掘と登用のシステム作り”、“社会教育士”という新しい人材(学びのオーガナイザー)に求められる能力。自分がやるのではなく、モチベーションを高め、その気にさせる力が求められるのでは。

社会教育士の育成のための仕組みづくり…インターネット配信+大学の関与。民間人材に対して、行政が信頼して任せられる風土をどう作っていくか。“若者・よそ者・馬鹿者”を受け容れ、任せてみる器の大きい地域に新しい風が吹く。

5. これからの社会教育に求められる視点

- (1) 大人にもアクティブラーニングの機会を提供する。
- (2) 個人の要望だけにおもねることなく、社会の要請とのバランスを確保する。
- (3) SDGs(持続可能な開発目標)の達成に取り組む。
- (4) 人生百年時代を生き抜くために必要なことを学ぶ。
- (5) AIの進展、Society5.0の社会の中で世の中の変化にどう適応していくべきかを学ぶ。
- (6) 若者(児童・生徒含め)を社会の表舞台に立たせる。

(7) ダイバーシティをどう受け入れ、寛容な社会をつくるか。自由・平等・博愛

(8) ソーシャルインクルージョン(社会的包摂)をどう実現していくか。

(9) 多発する自然災害、社会の変化に対するレジリエンスをどう高めていくか。

(10) コミュニティの衰退をどう受け止め、新しい社会システムを構築していくか。

6. 終わりに

社会教育の目指すところは、学びを通じてより良い未来を創っていくこと、その過程を通じて“公民”が生まれ、“幸民”だと実感できる人が一人でも多い社会を実現すること。

【文責 工藤朝博会員】

【研究協議】

テーマ: 「人がつながる」ことの意味を考える

豊かさの基準や幸せの基準は一人ひとり違います。それでも私たちは同じ社会で、同じ地域で暮らしています。自分にとって幸せとは何か。自分一人で幸せになれるのか。隣の人の幸せは考えなくてよいのか。私たちが幸せに生きるために、住民の一人として自分は何をすべきか、それは自分の成長とどのような関係があるのかについて、グループで協議します。

【第1グループ】コーディネーター 澁谷 拓 会員 (恵庭市立和光小学校)

第1グループでは、実践発表をくださった恵庭市黄金中央子ども会所属の小山会員、多寄地区学校運営協議会所属の工藤会員や多寄地区の皆様を始め、大学生、大学教員、社会教育委員、教育委員会職員など様々な職種や年齢層などの方々に参加し、活発に協議した。

今回のテーマである「人とつながること」をキーワードに参加者自らの経験や実践をもとに様々な視点から意見を交流しました。以下、次のようにまとめました。

(1) 人との接点をもつことを大切にする

さまざまな人と積極的に関わり、豊かな生き方を進めることができる人がいる一方で、上手くコミュニケーションを取れずに孤立感を深めている人もいます。そうした人たちの中には人とのつながりを求めていることが多く、サポートできる環境が必要である。保健福祉関係との連携・協力を図りつつ、様々な人とのふれあいや関わりができる機会の一層の充実が社会教育に求められる役割である。

(2) キーパーソンの存在を大切にする

新たな人との結びつきを生む活動の創出が地域に活性化を与える。新たな活動を創出するキーパーソンの存在が欠かせない。活動するきっかけは少人数でも作ることができる。「よそ者、若者、ばか者」と言われている人材を幅広く受け入れ、活動づくりを通して人とのつながりを少しずつ広げながら新たなコミュニティを形成することがポイントである。

(3) ボランティアで人とのつながりを大切にする

ボランティアは大人が行う実践的な学びではないだろうか。三浦清一郎氏は日本人のボランティアはやりがいや生きがいを求めて「自分のため」に行っているのが特長であるという。ボランティアの実践を通して、人とのつながることの意義や価値、喜びを実感し、そして自らのやりがいや生きがいを生み出す機会になる。ボランティアが自分の生き方を豊かにすることを再認識することが大切である。【文責 澁谷拓会員】



【第2グループ】コーディネーター 佐々木 邦子 会員 (北翔大学)

「人がつながる」ことの意味を考える、これが今年度研究集会のテーマである。前愛媛県新居浜市教育委員会教育長の関福生氏による特別講演もこれに関してあり、講演名称も「つながりを力に変える学び」であった。関氏は、社会教育に携わった豊富な経験を踏まえて様々な視点から貴重なお話をくださった。

その中で着目したのは次の点である。一つ目は、これからの社会教育に求められる視点としてあげられた10項目である。現代社会の情勢を的確につかみ新しい考え方を取り入れていたが、社会教育にいかに関わりつけていくのか、大いに関心が沸いた。二つ目は、社会教育の目指すものとして、学びを通じてより良い未来を創ることができるが、その過程で“公民”が生まれ、それを“幸民”であると自分自身で実感する人が一人でも多い社会の実現であるとした。このように学びを継続する人々に対して社会教育がどのように応えていくのか、今後の課題ではないかと感じた次第である。

講演後は二つの分科会での協議である。第2グループではさまざまな立場の方が多方面からの意見を



出され絶え間なく協議が続いた。前半ではコミュニティ・スクールのことが話題に上り、学校と地域のつながりについて、道内地域や東京都区内の実情を共有するに至った。関氏のこれからの社会教育に求められる10項目について尋ねたところ、社会的包摂(Social inclusion)が出された。それは、社会的に弱い立場の人への支援として必要ではあるが、成し遂げるのはきわめて困難であるとの意見である。支

援やつながりを行政や地域が望んでも、当人がそれを望まない場合もあるのであり、その意思の尊重も重要ではないかとの理解で一致した。

関氏が話された“白か黒かの答えを求めめるのではなく、納得するような議論ができればよい”との方針で進行をしたが、そこまでの到達は進行役の力量では無理であった。しかし、限られた時間で目指した全員発言の意見交換達成が何よりも喜ばしく、進行に対する出席の皆様のご協力に感謝を申し述べたい。

【文責 佐々木邦子会員】

【研究・実践報告①】

「リカレント教育論考～さっぽろ市民カレッジの成り立ち～」

発表者 野島 聡 会員(札幌市白石区保健福祉部)

日本におけるリカレント教育を推進するうえで、ひとつの契機となったのは、平成4年度に出された文部省生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」である。

札幌市では、平成5年度から札幌市社会教育委員会において、『札幌市におけるリカレント教育の推進について』をテーマとして協議を行ったが、リカレント教育の定義を、国の定義に、「札幌の街づくりを支えるボランティア・リーダー等の人材養成を目的とする高度で体系的な教育機能」を加えて整理した。あえて別に整理したという点が、カレッジの特徴の一つである、市民参画・ボランティア活動支援につながっている。

カレッジの仕組みの構築にあたっては、北大生涯学習計画研究部との共同検討を行ったが、具体的には、大学間のネットワーク化を支援しながらの学習機会の提供、専門分野をつなげる橋渡し役を担うことを目指したものであり、学習レベルのステップアップ、分野の多様化、まちづくり施策との明確な連携、市民参画・協働の実施、に結び付けようとしたものであった。

具体的には、カレッジのプレ講座となる『リカレント講座』を開講したが、その特徴のひとつとして、カレッジコーディネータの存在がある。単なる調整役に止まらず、チューターとしての役割を果たすこと、学習レベルの調整役を果たすことで、より受講者の理解が深まるものと考えた。

また、学習実践としては、生涯学習ボランティアの育成・支援を通じる仕組みを構築した。

リカレント教育の必要性については、必ずしも学習要求が高いというよりも、①変化する社会にいかに対応していくか、②変化により生じる現代的課題をどのように解決したらよいか、という大きな視点の中で強調されていたが、人生初期の段階において十分な学びを得ることのできなかつた方に対する視点も含まれる点を認識することは重要である。また、活動→学習→活動という流れの教育が一般化すると、より多くの市民にリカレント教育の機会が保証され、さまざまな社会的課題の解決(一例として、社会福祉と社会教育の継続的な学びの連携)につながるものと思われる。



【研究・実践報告②】

「地域の資源を活用したコミュニティづくりの実践」

発表者 小山 忠弘 会員 (ふるさと再生塾塾長)

(日本生涯教育学会会員・日本生涯教育学会北海道支部会員・黄金中央町内会子ども育成部長)

①コミュニティの範囲とは=黄金中央町内会(1925 世帯4085人、小学生 307 人中学生163人)に隣接する黄金北町内会(1270 世帯2628人、小学生 139 人中学生 63人)

②地域の資源とは 両町内会を挟んで設置されている「恵庭ふるさと公園」(地区公園4ha、カシワの木他50種類の樹木 1200 本が生育)

1、社会教育活動は理論ではなく、そこに住んでいる人たちの実践活動であること。そのためには活動を仕掛けるキーマンの発掘と、その人脈によるつながりづくりがポイントであること。

2、冬期間利用されていない「恵庭ふるさと公園」を、公園管理者を含む4人のキーマンが、毎年2月第1日曜日を「黄金ふゆフェスタ」という子ども中心の新たなイベントを創出したこと。これは毎年2月第1土曜日16時から、道路の両側にスノウキャンドルやアイスキャンドルに火をともしで行う全市的なイベント「シーニックナイト」(全町内会・企業・団体・学校等参加)で、翌日破棄されるサッポロビール工場の大量のアイスキャンドルを貰い受けて公園内に設置するとともに、両町内会の住民や子どもたちで、スノウキャンドルやミニ雪像づくり、イグルーづくり、そり滑りなどをして、夜9時まで明かりがとまり、住民が楽しめる公園に蘇生させたこと。

3、「黄金ふゆフェスタ」という新たなイベントの創出によって、幼児から高齢者まで冬の公園で楽しめる人のつながりが出来たほか、両町内会の役員をはじめ様々な人たちとのつながりが出来たこと、さらには、両町内会合同による夏のイベントへの発展構想が論議されるなど、ひとづくり・つながりづくり・地域づくりに向けて着実に歩み始めていること。



日本生涯教育学会 生涯学習実践研究所

<https://lifelong-center.jimdo.com/>

2015年1月15日に設立した「日本生涯教育学会 生涯学習実践研究所」は、インターネットサイトで、研究成果を公表しています。ぜひ、ご覧ください。

北海道地区センター長 小山忠弘

【平成30年度支部助成研究】

地域課題の解決に取り組む実践力を養う

～人が人をつながることの意味を考える～

学会北海道支部会員

工藤朝博

多寄のまちづくりを考える会会長

神田壽昭

多寄地区学校運営協議会会長

佐々木博

同地域コーディネーター

酒田純子

1 「人間」と「学習」と「教育」について

(1)「人間」と「学習」と「教育」の関係

人間は、学習することで、様々な能力を習得する。学習にはよいことも悪いこともある。教育は、教育的価値を吟味した学習を助けるしくみである。そうだとすれば、「学習」と「教育」は、学校教育で終わるわけではなく、生涯をととして続けるべきものだと思える。

(2)「家庭教育」と「学校教育」と「社会教育」の関係

「家庭教育」と「学校教育」と「社会教育」は、人間が生まれたときから死ぬまで継続的に行われるものである。それを繰り返しながら、人類は発展してきた。

(3)「総体としての教育」

人は生涯をととして「学習」と「教育」を継続して生活をしている。教育は家庭教育から学校教育、社会教育とつながって、段階的に学習を支援し、人格の形成を目指している。



2 「地域課題の解決」に取り組むという行為について

地域社会の維持・発展のために、地域課題を解決することは必要だが、地域課題は、いつも解決できるとは限らない。住民の主体的な学習活動として地域課題の解決に取り組む場合は、むしろ失敗することのほうが多いのかもしれない。しかし、教育の目的は「人格の形成」であり、この失敗から学ぶことの方が多い。社会教育の目的が「地域課題の解決」そのものになってしまうと、課題を解決できなかった学習活動は意味を失い、教育本来の目的や社会教育独自の性格と役割も見失っていくのではないかと、強い危機感を感じる。

人格形成よりも課題の解決が優先され、一部住民に負担がかかり、健康を害しては本末転倒になる。

3 人が人をつながる「きっかけ」と「場」・・・多寄地区の実践

①多寄中学校の統廃合にかかわる取組(保護者・地域住民の自発的な取組)・・・地域住民、支区 PTA、自治会連合会、同窓会等をつなぐ「きっかけ」と「場」。

②「多寄地区学校運営協議会」の取組(行政による意図的・計画的な施策)・・・学校と地域住民と保護者をつなぐ「きっかけ」と「場」。

③「多寄のまちづくりを考える会」の取組(地域の有志による自発的な任意団体)・・・行政と地域住民、地域住民同士をつなぐ「きっかけ」と「場」

4 「人が人とつながる」ことの意味・・・実践をとおして感じていること

- ①「人はひとりでは生きていけない」ことを実感する
 - ②「みんな違ってみんないい」ことを実感する
 - ③「相手を受け入れる・自分を知る・協力する」ことを実感する
 - ④「人から人が学ぶ・人間の魅力に気がつく・人が好きになる」ことを実感する。
- 知ることを学ぶ・為すことを学ぶ・共に生きることを学ぶ・人間として生きることを学ぶ。



参加者の声

－研究集会参加者アンケート－

- *参加してよかった。レベルの高い集会だったと思います。まだまだ勉強です。(60代・男性)
- *今回も社会教育について、人とのつながりについて情報交換でき、日ごろの活動に自信を持ちながら継続していきたいと思いました。(40代・女性)
- *これからのボランティアに生かし、子どもからお年寄りまでが楽しめる場を作ります。(60代・男性)
- *今年は、まさに生きた実践報告を拝聴でき、感動しました。次年度以降もぜひとも人生の先輩方の実践を拝聴したいと思いました。(50代・男性)
- *とても素晴らしい成果のあった研修会でした。(70代・男性)
- *教員として地域住民と共に生き、つながりを大切にすることは、社会に開かれた学校とも共通する思いです。勉強になりました。
- *学生という立場で参加させていただいたのですが、とても参考になる話が多かったです。来年度から教師として働くため、今回のお話を活かして頑張りたいです。(学生・男性)
- *教員となったときに地域の方との協力を大切にしたいと思いました。具体的な実践を聞くことができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。(学生・女性)
- *これからのことを考える良いきっかけになりました。元気をもらいました。ありがとうございました。(50代・男性)
- *いろいろ参考になることがたくさんありました。ありがとうございました。(40代・女性)

会員近況・・・「JAXA4年間と東京開拓」

桜庭 望 会員



2015年秋、紋別の小学校長から宇宙航空研究開発機構(JAXA)の宇宙教育センター長の職に就いてから4年が経ちました。その間、世界や日本の教育動向を踏まえ、教育活動目標の再構築に取り組みました。幸い、アジア諸国をはじめ、米国、欧州、豪州等への出張の際に様々な研究者、教育関係者、学生や子どもたちと接することで、世界的な教育の潮流を肌身で感じることができました。新しい時代に必要な資質・能力として重要なのは、学び続ける姿勢の育成です。JAXAの4年間の仕事を通じ、宇宙という学習素材を有効活用することで、生涯学習を推進していく一助になったことは幸いです。JAXA

の仕事が一区切りしたところで、2019年の10月から一般財団法人東京学校支援機構の統括コーディネーターとなりました。7月に財団が設立され、次年度の本格事業運用に向け、現在様々な準備に取り掛かっています。学校支援の仕組みが必要となった背景には、教員の働き方改革があります。東京都教育委員会として学校教育の質の向上を目指す目標に向かって、多様な外部人材を確保し学校に供給していくことが一つの方策としてあげられます。全国初の学校の多角的支援機関として、コーディネイト機能を充実させていくために、私のこれまでの経験の全てを投入していきたいと考えています。地域、大学、民間企業等の多様な組織の人材を学校と結びつけていく仕事は、生涯学習支援者の役割であり、子どもたちの未来のためばかりでなく、地域づくりやアクティブシニアにとっても必要なことです。新たな連携を創出していくことは、まさに「開拓」という言葉がふさわしく、NHK連続テレビ小説『なつぞら』のじいちゃん(泰樹役、草刈正雄)が発した「東京を耕してこい！開拓してこい！」という台詞とイメージが重なります。これからどのような成果を生み出していくことができるか、新たなチャレンジを進めています。

日々雑感・・・「名言に学ぶ」

高田茂 副支部長

明治の文豪島崎藤村の「名言に学ぶ」。数々ある名言に「人の世には三智」という言葉があります。学校教育などで広く取り上げられて、指導にも活用されているようです。私も学校教育、社会教育、生涯学習で活用させていただいた記憶があります。時が過ぎた今でもよく覚えています。これは『学んで得る智、人と交わって得る智、自ら体験することによって得る智』をバランスよく獲得することが大切であると言われていました。「自ら求めて学ぶ勉強こそが人の成長には必要であり大切である。また、人は多くの人とかかわりあって、他人の考え方等から自己啓発を図ることが必要であり、さらには実際に体験することが重要である」を教えてくださいました。まさに学びの基本であり、生涯学習だと思っています。また、こんな名言も。「若い時には、老人と親しみ、年をとったら若者を尊敬せよ」という言葉を残しています。人間は、若い時は血気盛んなので自信過剰になり、暴走しがちで無駄な失敗も多い。だから若い人が老人と懇親を深め、老人の体験の知恵に学ぶことは貴いことである。また老人は、とかく保守的な考えに固まり、変化・改革を嫌うものである。だから老人特有の偏屈な態度を改めて、柔軟な若者の頭脳と触れあうべきである。老人は、若者から時代の息吹を吸収し、青春時代の鋭敏な感性を取り戻すように心がけよともいわれています。何れも心に残る言葉ですね。二つ目の名言よりちょっと今の時代を振り返ってみますと、意外とおじいちゃん、おばあちゃんなど人生の大先輩と触れ合い、お話を聞くチャンネルが少なくなったと思っています。更に若者との交流も皆無に等しいでしょう。かつて学校はじめ各地で三世代交流等の名目で伝承遊びや餅つき等開催されて幅広い世代の方が交流していました。この交流がとっても大切だったと思います。そこには素晴らしい中味、実践があるからです。お年寄りの知恵を吸収することができるからです。こうした交流が時の流れとともに、少なくなっています。誠に残念です。これからは若者を含めた他世代間の交流が活発になってほしいなど願っています。特に子ども達の成長に大事な役割を果たすのは、おじいちゃん、おばあちゃんの年代の人達ではないかと思っているからです。高齢化が進む中で地域社会での取り組みに期待します。

Photogallery



【編集後記】 昨年の研究集会には、道内外から多くの方にご参加いただきました。いつもご支援ありがとうございます。本支部も、3年後には40周年を迎えます。一方、昨年11月30日～12月1日に開催された日本生涯教育学会大会は、160名を超える参加者を得て盛会に行われました。来年は、宮城県の尚絅学院大学で開催予定です。北海道からは、少し近く、参加しやすいのではないのでしょうか。全国の関係者が一堂に会する学会大会にも、ぜひご参加ください。(A.S)

日本生涯教育学会北海道支部

<http://h-lifelong.jpn.org>